

1. 学術論文

- 1) 「直観・思惟・意識——デカルトにおける〈私〉のあり方——」『論集』8、東京大学文学部哲学研究室、1989年、pp.146-159.
- 2) 「囚人の闘争——空白のデカルト倫理学——」『現代思想』「デカルトの世紀」第18巻第5号、青土社、1990年、pp.155-164.
- 3) 「無限の形而上学——デカルト『省察』における神の实在の第一証明による——」『西洋哲学史考』哲学雑誌第105巻第777号、哲学会編、1990年、pp.57-75.
- 4) 「「魂は常に思惟する」——デカルトの思惟実体についての一考察——」『哲学』第41号、日本哲学会編、1991年、pp.102-112.
- 5) 「観念・存在・内的感得——マルブランシュ・アルノー論争へ向けての予備的考察」『教養学科紀要』第24号、東京大学教養学部教養学科、1992年、pp.139-167.
- 6) 「技術とメディアへの声低き批判」『現代思想』第20巻第3号、青土社、1992年、pp.191-201.
- 7) 「内在・情感性・生——ミシェル・アンリの哲学——」『人文科学紀要』第98輯、東京大学教養学部、1993年、pp.231-288.
- 8) 「ジャン＝リュック・マリオンの思索を巡って（一）」『愛知』第11号、神戸大学哲学懇話会編、1995年、pp.2-54.
- 9) 「思考のイメージについて——ドゥルーズ覚え書——」『現代における哲学の意味』哲学雑誌第110巻第782号、哲学会編、1995年、pp.144-162.
- 10) 「現代フランスにおけるデカルト研究の現状」『デカルト』哲学雑誌第111巻第783号、哲学会編、1996年、pp.138-155.
- 11) 「「デカルトの存在論」覚え書」『アルケー』第4号、関西哲学会編、1997年、pp.141-151.
- 12) 「ジャン＝リュック・マリオンの思索を巡って（二）」『愛知』第12/3号、神戸大学哲学懇話会編、1997年、pp.6-22.
- 13) 「実体と实在——デカルト実体論の生成——」『フランス哲学・思想研究』第2号、日仏哲学会編、1997年、pp.15-28.
- 14) 「〈存在の一義性〉研究序説(1)——ドゥルーズの所説をてがかりに——」『紀要』第25号、神戸大学文学部、1998年、pp.59-86.
- 15) 「無限性から必然的实在へ——デカルトにおける神の实在証明——」『デカルト読本』湯川・小林編、法政大学出版局、1998年、pp.68-79.
- 16) 「ドゥルーズ『意味の論理学』を読む——その内的組合せの解明——」『五十周年記念論集』、神戸大学文学部、2000年、pp.47-76.
- 17) 「雀斑と倒錯——ドゥルーズの最初期思想瞥見——」『紀要』第29号、神戸大学文学部、2002年、pp.19-64.
- 18) 「ドゥルーズ哲学の生成：1945-1969」『現代思想』「ドゥルーズの哲学」第30巻第10号、青土社、2002年、pp.125-147.
- 19) 「潜在性の存在論——前期ドゥルーズ哲学の射程」『情況』2003年4月号、情況出版、2003年、pp.190-208.

- 20) 「哲学と社会学の幸福な闘争——タルドという奇跡についての考察——」『社会学雑誌』第20号、神戸大学社会学研究会、2003年、pp.95-110.
- 21) 「マルブランシュにおける無限と存在——「存在一般の漠然とした観念」をめぐって——」『フランス哲学・思想研究』第7号、日仏哲学会編、2003年、pp.14-26.
- 22) 「スピノザ哲学と『形而上学的思想』」『スピノザ-ナ』第五号、スピノザ協会編、2004年、pp.5-24.
- 23) 「存在の響きとしてのかすかな知覚——マルブランシュにおける真理の場と超越の形象——」『真理の探究』知泉書館、2005年、pp.61-91.
- 24) 「スピノザと中世スコラ哲学——(自己)原因概念を中心に——」『中世思想研究』XLVII、中世哲学会編、2005年、pp.166-177.
- 25) 「現代フランス哲学における超越論的経験(論)」『現代の哲学：西洋哲学史2600年の視野より』哲学史研究会編、昭和堂、2005年、pp.238-266.
- 26) 「形而上学を再インストールする——フレデリク・ネフ「形而上学とは何か」に寄せて——」『本別冊 RATIO』01号、講談社、2006年、pp.282-301
- 27) 「「私たちは自らが永遠であることを感得し、経験する」——スピノザにおける内在性の哲学の論理と倫理の一断面——」『哲学を享受する』東洋大学哲学講座4、知泉書館、2006年、pp.181-206.
- 28) 「顔の形而上学」『レヴィナス——ヘブライズムとヘレニズム——』哲学雑誌第121巻第793号、有斐閣、哲学会編、2006年、pp.37-56.
- 29) 「内在性の浜辺と形而上学の階梯——道具箱としての中世哲学に関する覚書——」「大航海」特集「中世哲学復興」no.62、新書館、2007年、pp.112-119.
- 30) 「マルブランシュ」『哲学の歴史 第5巻 デカルト革命【17世紀】』責任編集 小林道夫、中央公論新社、2007年、pp.459-505.
- 31) 「ドゥルーズ/ガタリ研究・活用の現在」・「後書きに代えて」『ドゥルーズ/ガタリの現在』小泉義之・鈴木泉・檜垣立哉編、平凡社、2008年、pp.698-717
- 32) 「非人間主義の哲学——ピエール・モンテペロの仕事めぐって」『死生学研究』第9号、東京大学大学院人文社会系研究科、2008年、pp.82-96.
- 33) 「力能と「事象性の度合い」——スピノザ『デカルトの哲学原理』第一部定理7に関する覚書」『論集』26、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部哲学研究室、2008年、pp.74-90.
- 34) 「ドゥルーズ」『哲学の歴史 第12巻 実存・構造・他者【20世紀Ⅲ】』責任編集 鷲田清一、中央公論新社、2008年、pp.613-662.
- 35) 「「形而上学」の死と再生——近代形而上学の成立とその遺産——」『岩波講座哲学02 形而上学の現在』岩波書店、2008年、pp.49-73.
- 36) 「スティルとリトルネロ——メルロ＝ポンティとドゥルーズ」『思想』2008年第11号、岩波書店、pp.256-274.
- 37) 「リトルネロ/リフの哲学 ドゥルーズ&ガタリの音楽論に寄せて」『現代思想』「ドゥルーズ」第36巻第15号、青土社、2008年、pp.194-203.

2-1. 報告

- 1) 「『省祭』における〈精神〉の構造について」1990-1991年度の文部省科学研究費(課

題番号：総合研究（A）02301113）による共同研究『デカルトの「第五・第六省察」の批判的註解とその基本的諸テーマの問題論的研究』（研究代表者：中央大学文学部教授所雄章）の研究成果報告書、1991年、pp. 116-130.

2) 「「コギト」再論」1991-1992年度の文部省科学研究費（課題番号：一般研究B03451002）による共同研究『行為の哲学と科学』（研究代表者：東京大学教養学部教授藤本隆志）の研究成果報告書、1993年、pp. 57-75.

3) 「スピノザと中世スコラ哲学——（自己）原因概念を中心に——」2002-2004年度の科学研究費（課題番号：基盤研究(B)(2)14310005）による共同研究『認識における超越論的立場と自然主義的立場との対立に関する概念史的・問題論的研究』（研究代表者：神戸大学教授山本道雄）の研究成果報告書、2005年、pp. 31-49.

2-2. 翻訳

1) 「存在・神・論」（ジャン＝リュック・マリオン著、解説を含む）『現代デカルト論集I フランス編』デカルト研究会編、勁草書房、1996年、pp. 279-343.

2) 「ライブニッツにおける原初的思考対象の問題」（石黒ひで著）『思想』2001年10月号、pp. 33-46.

3) ピエール・モンテベロ「いかに自然を思考するか？——ドゥルーズの自然哲学」『死生学研究』第9号、東京大学大学院人文社会系研究科、2008年、pp. 60-81.

2-3. 事典項目

1) 『フランス哲学・思想事典』弘文堂、1999年、pp. 23-25, p. 29, p. 61, pp. 70-79, p. 112, p. 603. (順に、コラム「心身問題」、「ジビューフ」、「ベリュール」、「マルブランシュ」、「ヴォーブナルグ」、「マリオン」)

2) 『事典 哲学の木』講談社、2002年、pp. 605-607, pp. 960-962. (順に「住む」、「ユーモア」)

3) 『スーパー・ニッポニカ』(DVD-ROM) 小学館、2003年（「強度」、「リゾーム」)

2-4. 書評

1) Olivier Boulnois: *Être et représentation : Une généalogie de la métaphysique moderne à l'époque de Duns Scot (XIIIe-XIVe siècle)* Presses universitaires de France, Paris, 1999, 『中世思想研究』中世哲学会編、第43号、2001年、pp. 226-230.

2) ジル・ドゥルーズ『無人島』、『図書新聞』2655号、2003年11月22日

3) 江川隆男『存在と差異』、『スピノザーナ』スピノザ協会年報、第6号、2005年、pp. 79-86

4) 村上勝三『観念と存在 デカルト研究1』、『フランス哲学・思想研究』第10号、日仏哲学会編、2005年、pp. 209-213

5) 松本潤一郎・大山載吉『ドゥルーズ 生成変化のサブマリン』白水社、2005年、『図書新聞』2766号、2006年3月18日

6) 「形而上学の一つの戦場の鮮やかな提示」柏端達也・青山拓央・谷川卓編訳『現代形而上学論文集』、『未来』7月号、2006年、no. 478, pp. 34-38.

7) 上野修『スピノザの世界』講談社、2005年、『フランス哲学・思想研究』第11号、日仏哲学会編、2006年、pp. 205-209.

- 8) 熊野純彦『西洋哲学史 古代から中世へ』・『西洋哲学史 近代から現代へ』(岩波書店、2006年)、「フランス哲学・思想研究」第12号、日仏哲学会編、2007年、pp.173-176.
- 9) 中原昌也『ニートピア2010』(文藝春秋、2008年)『論座』2008年6月号、朝日新聞社、pp.324-325.
- 10) 久米博・中田光雄・安孫子信編『ベルクソン読本』(法政大学出版局、2006年)『フランス哲学・思想研究』第13号、2008年、pp.146-152.
- 11) 「隷属への抵抗を静かに促す」(平井玄著『千のムジカ』青土社、2008年)『東京・中日新聞』2009.3.15.

2-5. その他

- 1) 「神学的転回?——フランス現象学の四十年」『現代思想』「総特集 知と生命」第29巻第17号、青土社、2002年、pp.52-55.
- 2) 「哲学史の実験空間」『現代思想』第31巻1号、2003年、p.230.
- 3) 「スピノザとデカルトの間に関する疑問と報告」『スピノザーナ』スピノザ協会年報、第四号、2003年、pp.33-35.
- 4) 「ドゥルーズ&ガタリ『千のプラトー』」『現代思想』「9月臨時増刊 ブックガイド60」第32巻第11号、2004年、pp.244-237.
- 5) 「差異哲学と哲学史のポリフォニー——ドゥルーズ没後一〇年に寄せて——」『創文』2005.08.no.478、2005年、pp.12-16.
- 6) 「事典の夢・夢の事典」『本』講談社、2005年9月号、2005年、pp.45-47.
- 7) 「ドゥルーズ&ガタリの非人間主義へ向けてのメモ」『KAWADE 道の手帖 ドゥルーズ』河出書房新社、2005年、pp.122-125.
- 8) 「東大教師が新入生にすすめる本」『UP』第36巻第4号、2007年、pp.20-22 (『東大教師が新入生にすすめる本2』文春新書、2009年、pp.201-204に一部訂正の上、収録) .
- 9) 「赤塚不二夫と動物化の諸問題」『KAWADE 夢ムック 文藝別冊[総特集]赤塚不二夫』河出書房新社、2008年、pp.160-166.
- 10) 「哲学史研究の現在」(神埼繁・熊野純彦両氏との鼎談) および「非人間主義的な哲学の白眉」(アンケート)『哲学の歴史 別巻 哲学と哲学史』中央公論新社、2008年、pp.54-84, 408.
- 11) 「合意とパッチワーク」(鶴見俊輔『アメリカ哲学』解題)『KAWADE 道の手帖 鶴見俊輔』河出書房新社、2008年、pp.150-153.

3. 学会発表・コメンテーター

- 1) 「魂は常に思惟する」——デカルトの思惟実体についての一考察——日本哲学会大会、新潟大学、1990年5月13日
- 2) 「知ることと在ること——デカルトの実体論をめぐって——」日仏哲学会大会、シンポジウム「デカルト哲学とは何であったのか」、日仏会館、1996年3月30日
- 3) 「デカルトと存在論」関西哲学会、シンポジウム「デカルト(生誕400年)」、京都大学、1996年
- 4) 「褻と内在——ミシェル・アンリの主観性概念をめぐって——」日仏哲学会大会、シンポジウム「ミシェル・アンリ——その自我論を中心に——」、日仏会館、1997年4月2日

- 5) 「哲学史の再編とバロックの哲学——ドゥルーズの襲の哲学に寄せて——」哲学会大会、シンポジウム「バロックの世紀から哲学史を読み直す」、東京大学（本郷）、1999年11月7日
- 6) 「マルブランシュにおける無限と存在——「存在一般の漠然とした観念」をめぐって——」日仏哲学会大会、春期シンポジウム「合理主義と真理」、京大会館、2002年3月31日
- 7) 「ファヴェーク教授(オランダ・ユトレヒト大学)講演会」コメンテーター、スピノザ協会主催、東京大学教養学部、2002年9月21日
- 8) 「スピノザ初期思想への一考察——第二スコラとの関係において——」スピノザ協会大会、講演、東京大学教養学部、2003年4月26日
- 9) 「ドゥルーズと精神分析」メルロ＝ポンティ・サークル第11回大会、シンポジウム「メルロ＝ポンティと精神分析」、立命館大学、2004年9月23日
- 10) 「スピノザと中世スコラ哲学——(自己)原因概念を中心に——」中世哲学会大会、シンポジウム「中世から近世へ——存在論の変容——」、筑波大学、2004年10月31日
- 11) 「佐藤一郎氏著『個と無限——スピノザ雑考』(風行社)合評会」司会・コメンテーター、スピノザ協会主催、山梨大学、2005年7月3日
- 12) 《Degrés de réalité》 et puissance. Remarques sur Principia... I, 7, scolie, Journée d'étude franco-japonaise, 《Spinoza interprète de Descartes : les Principia Philosophiae Cartesianae》, Université de Paris I, 2007年6月9日。
- 13) 「流出と表現——スピノザとネオ・プラトニズム——」新プラトン主義研究会シンポジウム「17世紀哲学とプラトニズム」、神戸市外国語大学、2007年9月15日
- 14) 「現代フランス哲学と生命論 ピエール・モンテベロ教授講演会」司会・コメンテーター・通訳、G-COE「死生学の展開と組織化」主催、東京大学、2007年10月19日
- 15) « La causalité immanente chez Spinoza et les scolastiques. », SPINOZA ET LES SCOLASTIQUES Colloque international, Paris, Sorbonne, Centre d'Etudes Cartésiennes - Paris IV et Groupe de Recherches Spinoziste - CERPHI, organisateur: Frédéric Manzini, 2008年3月22日。
- 16) “ Philosophy of Non-Humanism: Deleuze and Ritornello “, The third BESETO Conference of Philosophy “Philosophy in East Asian Context: Knowledge, Action, Death, and Life”, The University of Tokyo, Komaba, 2009年1月11日。